

浄土

五月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和四十五年四月二十五日 印刷 昭和四十五年五月一日発行

第三十六卷

第五号



—目 次—

表紙「セキレイ」松濤達文画

特集・家庭としつけ・

- 家庭生活としつけ……………藤 原 弘 道 ……(2)
- 「しつけ」に想う……………大 野 祝 子 ……(6)
- アメリカ人の価値観—家庭しつけの基本になるもの
小 野 泰 博 ……(9)

— . — . — . —

- 聖典解説⑤「小消息」の御法語に学ぶ ……小 沢 勇 貫 ……(13)
- 寿命院にて……………松 本 国 雄 ……(16)
- 念仏生活⑤ 五重相伝のお話し……………藤 井 実 応 ……(18)
- チャンス到来—仏恩報謝の聖戦へ—……………岡 本 薫 ……(24)
- 聖典物語⑤ カピラ城の滅亡……………つるたたんせん ……(26)
- 道① 比叡の道……………高 橋 良 和 ……(30)
- 宝物シリーズ 徳本上人御名号碑……………(32)



今月のことば

生者必滅

初夏ともなり、万木が若芽をふいてくると天地の生氣が蘇ってきたようで、希望に胸がふくらんでくる。そして、この世に生きているわが生命の有難さと尊さをしみじみと感じ、大地を駆け廻りたいような衝動にかられる。幸いに与えられたこの生命を、われわれはできるだけ大事にし、尊重し、いのちある限り最善をつくさなければならぬ。

しかしこの生命も、限りあるものである。生者必滅、会者定離とは、み仏の尊い教えである。それは自然の道理ではあるが、なかなか体認できない道理である。しかし、われわれはできるだけ早くこの道理を見極めて、生死の迷いから離脱しなければなるまい。

ところで、生者必滅とは言っても、この頃のように、自分の不注意や、安易な行動によって、あたら尊い生命を失ってしまうことは、この道理を地で行きすぎたことである。交通事故、工事事故、あるいは公害等、無軌道、無計画な行動による生命の喪失は、なげかわしい限りである。切角与えられた尊い生命を、余りにも軽々にしすぎるのではなからうか。生命を尊重する心掛けが、この頃とみにうすいことが感ぜられてならない。

先頃、心臓移植の問題にからんで、人間の生命の終りを、何処に置くかということと盛んに論議されたことがあった。心臓や呼吸が止まるとき、或いは脳波が消えるときなどという議論されたようであるが、医学の進歩のためとは言え、生命の完全な終焉を待たないで人体を処理することは、やはり許せないものがある。試験管ベビーの問題も騒がれているが、この生命というものは、あだやおろそかに人間が自由にできるものではない筈である。簡単に造ったり、殺したりできないこの上なく尊いものなのである。生者必滅の道理は道理として、われわれはもっと生命の尊さを強調したい。そして、初夏とともに、この生命を謳歌したい。



|| 特集 ||

家庭としつけ

《その1》

家庭生活としつけ

藤原弘道

(京都・東山学園長)

家庭は親子の絆をふかめる

ちかごろは昔とちがってマイホームの核家族が多くなつて、子供の数も年々に少くなり、一人二人という家族構成が大変ふえてきました。たとえば東山学園の受験生の場合、その少い子供のなかにも母子家庭、欠親家庭の多いことが目立ってきました。もう子供も中学生だし手がかからないから、留守にしてもよからうと思つて勤めにでたり、〇〇教室や講

習会といつて家をあげがちな母親が多く、共がせぎ家庭、留守家庭がふえてきました。この油断が大事な、可愛い子供をとんだ方向に走らせることになるのです。宅の子にかぎって大丈夫と思ひこんだそのことが子供にすきを与えることになることを十分心しなければならぬと思います。

中学校から高校へ進学する年ごろの子供を、家庭で養ふことは学校教育以上に大切であるはずですが、事實はまったく手放しの状態なのであります。両親がそろつてゐる家庭でさえ、子供と話をする機会が少なくなつてきました。仕事の都合で一家そろつて夕餉の食卓をかこんで話をする時間のない

親、自分らは戦前の教育を受けたのだからといって、子供の考え方や行動について注意をしない親、さらに注意しないことに自由・寛容の態度を粧う親、逆におしつけのような干渉をして反感をかう親などさまざまですが、これでは親子の絆もたもたれにくいわけであります。こういった傾向は第二反抗期に属する子供をして一層、親子間の世代の相違を深めさせ、親子間に不調和、不信の感情をいだかせるようになります、ついには断絶というまことにオーバーな、好ましくない表現をとるようになってくるのです。

信頼ということは、親子の間柄を指すのに適した言葉であるのに、親子の間にさえ断絶があったのでは、どうして他人を信頼することができましようか。親子が互いに信頼しうるよう親はもっともっと、家庭をいかすように工夫したいものであります。

しつけは乳幼児のころから

特集

京都洛北の名物の一つである北山杉は、日本建築の座敷の床柱として、珍重されていることはご承知のとおりであります。が、いずこも同じでここでもベテラン職人が減るので、人件費のみかさんで生産がおちていると聞いています。花も咲かない杉のような木でも、手入れ次第で生産が伸びたり伸びなかったりするのです。

人間の躰も、しつける時期に躰をしておかないと、非常識な不調和の人間となる外ありません。

乳幼児から幼稚園に入るころまでは、ただ可愛いばかりで、なんでも子供の言いなり放題にして、ちっとも躰をしなから、わがままで、ブレイキのかからない子供に成長してしまうのです。欲求不満のためにやたらに攻撃的行動にでたり、ノイローゼにかかったりする人がありますが、そういう人は正常な人間ではありません。正常な人なら無意識のうちに抑圧したり、意識してみずから制止したりいたします。

そうした抑圧、制止というブレイキは、乳幼児のころからの躰がはたらくわけであって、成長してからの躰はそうした乳幼児時代の躰の上に行われ、さらに高度な躰がなされなければなりません。基礎的な躰をおこたった青少年は実に可哀想で、すべて親の責任といわねばなりません。

子供の個性をのばす配慮

世の親たちが子供によせる期待は大きく、また期待はずれで失望することも多いものです。教育ママといわれる人の多くは、自分が子供の時にできなかったことを、わが子によって実現さそうと期待をかけたり、母親の虚栄から子供に無理なおしつけをしがちであります。子供の個性や能力を棚あげにして、勉強や稽古事においたてている姿は、まるで地獄の赤鬼・青鬼のように思われることがあります。子供はいつも母親の顔をのぞきこみ、背のびのしっぱなしで、欲望不満がかさむばかりで可哀想な次第であります。のびのびとした子供らしさがなく、いつの日か解放された時に、つもりつもったものが洪水のように堰を切って、親子の愛情や社会のルールをおしながしてしまふことになります。そういう点で、わが子の性質、個性、能力を十分観察して、適当な教育をすべきであります。親たちは子供の陰にあって、子供とともに悩み、ともに苦しみ、ともに喜ぶあたたかい心遣い、愛情を忘れてはなりません。

しつけの底を流れるもの

躰は親が子供に対して行なうのでありますが、自分ができないようなことを強いたのでは、逆効果をまねくことになるでしょう。躰という字を大字典でひいてみますと、饗応・応待等に、物事の扱い起居動作の行儀を教えならすこと。かくして人品を高尚優美とならしむる故に、身と美を合すと記述されてあります。いかにもそのとおりであります。起居動作は単なる外面的・表面的なものではないはずであります。いくら外面的に起居動作が立派にできたとしても、その人の本心がそうさせているのか疑問に思われます。人の心がその人の表情となり、態度、動作となつてあらわれるのが自然のなりゆきであります。私はそうした点から、躰は単なる躰にとどまらずに、躰の底を流れる精神をより重要視し、この方面から教育しなければならぬと思うのです。

京都はさすがに仏都でありまして、ラジオのコマーシャルに「朝に礼拝、夕に感謝」ということが飛びだしてきます。核家族の家庭にはそういう雰囲気乏しいでしょうが、

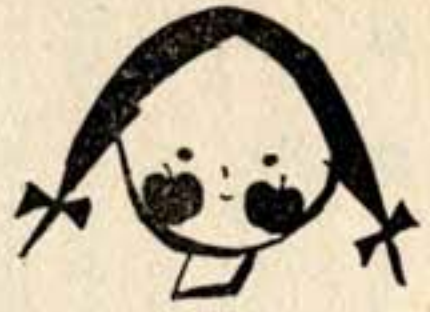
老人夫婦と同居の家庭にはさすがに、こういった宗教的雰囲気が残っています。これからはこういう雰囲気や家庭に求めることはむづかしくなることと思いますが、日本人の精神生活や生活をささえてきた、仏教精神が家庭から漸次失われていくということとは、たえがたい程淋しいことでもあります。つまり驢の底を流れる日本人の心がなくなっていくことであるからであります。

私独りが生きていくということは、結局生かされているからであります。自分独り生きていくと思うのは、思いあがりも甚だしいことで、大きく眼を開いてみれば生きていられるということとは、天地人のおかげのたまものであります。この生かされている、おかげのたまものであるということが理窟でなく、本当に会得され、わかってくると、感謝の気持ちかわいてきます。感謝の心のある日暮しはいつもにこにこ、さわやかで、不平不満のかけらもなく、精神医学からいっても理想的な健康生活を送ることが保証されるであります。いかされている自覚の持ち主は、ものを生かして使い、無駄をせず、ものの生命を尊重いたします。不殺生とはこうい

った心根に咲く花であります。今日のような豊かな物質生活を送っていますと、ついものの有りがたさを忘れがちであります。たとえ一枚の紙、一粒のお米でも、天地人のめぐみの結晶であるとおし頂けるならば、決して粗末にはいたしません。有量に無量を見出し、すべてに価値を見出すことが出来てこそ、心は豊かなのであります。

生かされている自分が、はたしていかされているだけのことをしているだろうかと思ひ、懺悔することもあります。その時こそ申訳けない、あいすみませんという気持ちがわいてきます。ときには、いかして下さっている天地人のめぐみに対し、どれだけのご恩報謝ができていくかを反省することもあります。その時には自分で出来ることなら、なんでも進んで奉仕するという行動にかりたてられます。

いづれにしても、ありがとうございます。すみません、申訳ありません。なんでもさせて頂きます。というこの三つは、宗教情操のあらわれであります。こういう情操を基礎にして、この上に子供の年齢に応じた驢を行なうのが理想的といえるでしょう。



「しつけ」に想う

大野 祝子

(東京・江東区白河小学校教諭)

「しつけ」について何か一言をと求められまして、正直のところ、すこぶる当惑しているというのが、現在の私の心境です。

といいますのは、「しつけ」ということをあえて文にする必要が、なぜあるのかという疑問をもつからなのです。

このごろ、町のどの本屋さんにはいりまして、「家庭」とか「育児」とかいう標示板の下には、「〇〇のしつけ」「しつけとは」「しつけの相談」などといったたぐいの本がそれぞれ有名、著名の作者を得て、雨後のたけのこの如くならんでいるのを見受けます。

世の中の人々が、かくも「しつけ」ということに関心を寄せるようになってきたのかと喜ばしく思う反面、年寄りの悪いくせで、また別の心配が頭をもたげてくるのです。

本屋さんの店頭にならぶそれらの本は、内容的にはどれをとりあげても、たいせつなことばかりなのでしょう。しかし、いったいそのような「しつけ」に関する本が、どのような人々に読まれ、それがどのような形で実行されていくのか、はつきり言って私にはわからないからです。

試みに、広辞苑(岩波書店第二版)をひもといてみますと、

しつけ(仕付け)

- ①作りつけること。
- ②(「躰」とも書く。)礼儀作法を身につけさせること。また、身についた礼儀作法。
- ③嫁入り。奉公。
- ④(「躰」とも書く。)縫い目を正しく整えるために仮

にぎつと縫いつけておくこと。

(以下略)

と書かれています。

世に言われる「しつけ」とは、右に示された②の「礼儀作法を身につけさせること。また、身についた礼儀作法。」をさしているのでしょうかと思います。

さらに、「躾」という漢字は、現在当用漢字以外の漢字となっていて、小学校の教科書の中には、もちろん使われていません。また、小学生の用いている国語辞典の中には、「しつけ」ということばすらのせていないものもあります。これは、ある意味で考えれば、「しつけ」は、当然親（おとな）がなすべきものだから、子どもには、それをことばとして知らしめる必要がないのだという編者の方の深い心づかいでもあるのではないかと思えるのです。

さて、「しつけ」の語源をたどってみますと、もともと和服の被縫の用語から生まれたものようです。布を仕立て、仕上げるに先立って、織機からとりはずしたばかりの布を仕付

けることです。これに「躾」つまり身を美しくするという字をあてるのは、ちょうど裁縫の場合、織機からおろしたばかりの布に一定の型を与えて縫いやすくするように、まだ、東も西もわからない子どもに、主として身近な礼儀、作法などを教え、身を美しくする。身を整えることを教えたものなのでしょう。

布が、まず仕付けをしなければ、仕立て、仕上げることができないのと同じように、子どももまず、これを幼児のうちにしつけておかなければ、人間として必要な教育を施したり、真の人間として育てあげることとはできません。

要するに、しつけとは、子どもが健康であって、将来社会の一員として社会生活を営むうえに絶対必要なことなのです。子どもによいしつけを与えることは、親の子どもに対する義務であり、これを怠る者は親としての責任を果たさないものといわれても、しかたがありません。

逆に子どもの側に立てば、幼い時よいしつけを与えられた者は、親から無形の財宝を譲り渡されたといっても、決して過言ではないでしょう。

前に述べましたように、「しつけ」の本をどのような人々が読み、それをどのようにとりあげていらっしやるのかと心

配めいたことを申し上げた理由も、実はここにあるのです。

礼儀作法とか、身の美しさ、心の美しさといわれるものは、本を読んだから、あるいは知識として得たからといって、決して身につくものではないことは、どなたでもご存じのことでしょう。

人間一つのことを身に付くということにはたいへんな年月を要する場合さえあります。

それを一編の本によって、あるいは問題解答式の一つの項目に頼って、解決しようという態度や心こそが問題だと思うのです。

お茶やお花やお習字をならったからといって、その子に極めてよい躰が身に付いたとはいえません。むしろ、その背景にきびしく暖かい親のしつけがあつてこそ、よりよいしつけに通ずるお茶であり、お花になるのではないのでしょうか。

しつけとは、付け焼刃ではいけません。その場、その時だけの応待がていねいにできたからといって喜んではいけないのです。

明治生まれの私にとって、躰というものは、幼い時の家庭生活そのものであったように思えます。

朝目覚めた時から、夜床にはいるまで、子として親に接

し、そして得たものが、いま「しつけ」とよばれているものではないかと思うのです。そして、その「しつけ」を断固として行なわしめたものは、親自身が知らず知らずのうちに身につけていた親の自信といったものだったのではないかと考へるのです。

終戦後、日本人の失ったものの中で、もっとも大きく貴重だったものは、子どもを育てる親の自信だったのではないかと思います。

子どもをきびしくしつけるのが、親のかけがえのない義務であるのに、それをせず、ただひたすらに世の中の動きのみに気をとられて、本当の子どもに対する「しつけ」を忘れてしまっていたのです。そして、子どもが成長してくるにつれて、これではいけない、なんとかしなくてはと、あわてて、本来幼い時にしつけることを、大人の權威として与えたところで、これは、しつけではなくて、「おしつけ」になってしまふのです。

また、心の交流を忘れて、便利になった世の中で、単に金銭や物を買ひ与えておけば、子どもは親に満足していると錯覚したことも大きな間違いです。そのことから、形はちがつても、さまざまな悲劇がくり広げられています。

アメリカ人の価値観

—家庭しつけの基本になるもの—

ある方のお話に、こんなことがありました。
夫婦が子どもの前で夫婦げんかをしていても、その時父親が悪いのだとか、母親に理があるとかは、子どもは考えないしわからない。

しかし、おとなとは、こういう時にはこうするんだな、おとなとは、そういうもんなんだなという配線が脳の中にできあがるんだ。というのです。

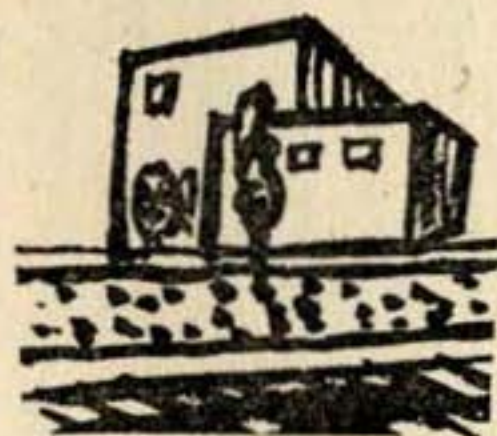
昔から「三つ子の魂百までも」といわれています。このお話からしても、しつけの基本は、親としての毅然たる子に対

する態度が、終始なければならぬのではないかと思います。

堂々と仕事に励む父親のすがた、家事に台所に、せんとくに汗する母親のすがた、そして夫婦の和、家庭の環境、すべてが子に対するしつけの場です。子に媚びる親でなく、その家庭に応じた環境の中で、親として自信をもって子に対する——そんな姿勢こそたいせつなのではないでしょうか。

終わりに、ある人の詠んだ歌を一つ
惜しみなく 物を与えて 子どもらに

自主性を与えぬ 親の無慈悲さ



—大正大学講師—

—小野泰博—

戦後、いろんなものと一緒にアメリカの教育方法、教育技

術も入ってきた。いまでは若いお母さん方が育児書片手に、小数逆良のこどもを育てるべく御苦心なさっている。たしかに、育児のことも、しつけも一つの技術として考えると

がいかにもアメリカ的な一面である。児童心理学の本は多い。しかし児童観を考えさせてくれる本は少い。日本には古来、こどもを子宝といみる児童観と、他面ガキ（餓鬼）ということばに代表される、世話のやける、厄介な奴という見方もないではなかった。しかしこの前者の子宝観は「生めよ増やせよ」のスローガンと一緒に、いつの間にか人的資源化されてしまった。アメリカ人の児童観はどちらかといえば、後者のガキ観に近い。彼等は自分のこどもを老後の社会保障がわりに育てるよりも、つき離して一人立ちさせることに重きをおいている。われわれが英語教科書で習うような children ということばは日常語でなく、生活語としてはむしろキッツ (kitt) が普通で、この発音といい、感じからいってどうも「ガキ」に近い呼称と思われる。

ここでは、育児書や児童心理学の復習ではなく、アメリカ人のガキ観のもとにある価値観を考えてみたい。アメリカ人のものの考え方を支配している二大支柱は、やはりよく言われるように、ピューリタンの精神とパイオニア（開拓者）精神とを抜きにしては考えられない。この二つをもとにして展開して、価値を精神科医レッシュは、次の四つにしばっている。1 平等観 2 社交好き 3 成功 4 変化。ここでは前三

者についてふれてみたい。（4は前三者に包括される）

1 **ピューリタンとパイオニアの精神** 私が一年間一緒に暮らした下宿のおばさんは、もう七〇才だったが、テンパランス運動のメンバーだった。なんのことはない禁酒運動のことである。下宿ではアルコール類は一切禁止だった。あとで知ったのであるが、それが下宿人の条件でもあった。知人の人類学者にこのことを話したら、「それはとても貴重な体験をされます。アメリカにはまだそうした保守的側面がそのような形で生きているのです」といった。この下宿のおばさんはテレビに出てくるキッツ場面に顔をそむける。旧いアメリカがどこかに生きている。敬虔、儉約、清潔勤勉と支配、意志力がピューリタンの精神基盤をなしている。

一方インデアンとの戦い、きびしい自然、この両者から培われたのがパイオニアの精神だといわれる。開拓民にとって大事なことは集団としての団結であった。そこから、YMC A、ボーイスカウト、大学では fraternal 組織（友愛会）をつくる集団訓練が出てくる。またパイオニアの精神からは、少々の粗野さは問題でなく、タフガイに代表される無鉄砲さも尊重される。すべてこれは生き残るために必要だった。意志のたくましくないやつ、怠けものは一番きらわれる。彼等

にいわせると黒人がみじめなのは、その怠惰ゆえであると言つてはばからない。

2 平等 よく言われる移民の寄合世帯であるアメリカ人は、人種のルツボである。いろんな人たちがとにかく一緒に生きてゆかなければならない。そこに平等観が必要だった。しかし彼等の言う平等は無差別的人類愛的な手放しの平等ではない。たしかに今日のアメリカでは地位、権力、富の差はきびしい。彼等はいふ、人間だれでもチャンスだけは平等に与えられている。それを努力、工夫によって、成功までよじ登るか否かは本人にかかっている。それを *equal opportunity* の平等という。したがって勝利者が、その努力で勝ち獲たものを享受するのは当然の権利とされる。こうした平等の前提にもとづく競争的個人主義が是認される。

3 交際好き アメリカでは、こどものときから、野球にしろ、フットボールにしろ、チームのメンバーとしてうまくやうってゆけるような訓練が重視される。日本人やヨーロッパ人のあこがれる親友などというべつついたものを彼等は好まない。その代り初めて会った人とも、私事にわたらず話し合え

なければならぬ。それが後年産業会や軍隊生活の中でチームづくりのできる基礎訓練になる。たしかにアメリカ人は集団指向的であるといわれる。アメリカの生活に欠かせないものはカクテルパーティーである。これはつまらないおしゃべりのように見えるが、ちゃんと新しいインホームーションを交換し、お互いの評判、人気も十分値踏みされ、とりひきも成立する。アメリカ人には、表面的で、スタイル化した社交性が必要とされる。とりわけどれほど相手の人たちに自分が好かれているかということ、見上げられているか、見下げられているかが無邪気なほど気になる社会である。そこから約束を守り、ルールに従う生活が培われる。

4 成功 アメリカ人にとって成功は最大の美德であつて、しかもつねに量的にはかられる。より大きなもの、より強いもの、よりスマートなものがすべてよいとされる。とくに面白いのは *big man* ということばである。これは単に偉人でも、権力者でもなくそのグループで重要な人物という意味である。親の愛情すら、それらを養うための条件づけと考へている。うちの赤ん坊がよその赤ん坊より、どれだけ早く話し出し、歩き出したか、プールの泳ぎでどんな記録をとったか、新聞配達でいくら稼いだか、学校の成績が何点か、はっ

きりさせることを好む。

ベビーシッターというアメリカ式子守りの制度はよく知られている。中学一年の女の子が、一時間の子守り代を、隣りのおばさんは七五セント、向いの家で一ドルくれるというように、労働をはっきり金に換算して、むき出しの現金を手握って帰る。金を稼ぐ (making money) ことは、いやしいことでもなんでもない。正当な労働に対する報酬である。お菓子やお礼のことばなぞでごまかされない習慣は、一方でこどものときから、仕事に対する義務感、責任感を植えつけるのではあるまいか。

それにまだ精神の上では、リンカーンに代表される、"丸木小屋からホワイトハウス" の夢はこどもの心から消えさつていない。金持ち神話 (richmy thology) も生きている。いつかは自分もフォード、ロックフェラー、カーネギーになれるというねがいである。

5 まとめ このように平等の条件下で、成功するため、より社交的でなければならぬアメリカ人は、哲学的な信条とか、イデオロギーよりも、むしろ心理学的な自己の同一性

(identity) ということばを愛好する。一体自分は何者なのかという問が、哲学的な問い方よりも、むしろ、自分の社会にむける役割りは何か、自分は何を、やって行けばよいのかといった具体的問題が関心事となる。スペイン人は情熱的、フランス人は思考的、イギリス人は行動的でいわれるが、アメリカ人こそもっとも行動派の典型であるといえる。

家庭づくりにおいても、父権性の強いヨーロッパでは、父親を頂点とした三角形の家族になりやすいか、アメリカでは男女の平等と、母権性の性格が強く、父親、母親は同一レベルの頂点とする梯形型が多い。夫もよく家事を手伝い、夫婦間の職務分担もばやけている。親の権威というものも、夫と妻がお互いに家族という集団内で、チェックし、バランスをとり合って形成される協力の所産である。

そしてフロイドの心理学からすれば、ヨーロッパの家庭は親の役割りを内面化することによって、堅固な super-ego (超自我) を形成する傾向が強いが、アメリカでは、超自我と id (本能的衝動の源泉) を調整する機関としての自我に重点のむかれる自我心理学であって、こどもはこの上下の圧力と闘うことにエネルギーを費すよりも、他人の自我、対人関係にエネルギーと、より多くの訓練が培われることになる。

「小消息」の御法語に学ぶ 〱五〱

六 慎みとはげみ（続き）

行は一念十念なほむなしからずと信じて、無間に修ずべし。一念なほむまる、況や多念哉。

先には「一念十念に足りぬべし」と述べ、いまは「無間に修すべし」とすすめられたのである。このことは『禪勝房に示されたお詞』とも併せいただき、私どもは正しい信仰に進まなければならない。すなわちそのお詞には「一念十念に往生すといへばとて、念仏を疎相に申すは信が行をさまたぐるなり。念々不捨者——たえず相續すること——といへばとて、一念を不定に思ふは行が信をさまたぐるなり。信をば一念に生ると信じて行をば一形にはげむべし」とあり、信ずる様と行ずる様をよくよくこころ得わけなければならぬことを教えておられる。安心の徹底は、一念十念往生



一大正大学教授一
小 沢 勇 貫

するということを決して信ずるにある。この決定の信があれば自ら多念相續され、ひと時ふた時、千遍万遍となることは、ありがたいことである。上人の高弟隆寛律師は「一念の御法にあかぬうれしさに数遍を重ねるなり」と日々八万四千遍の念仏をとなえたというが、まことに尊いことである。

ひまが出来たとき念仏するのではなく、忙しく余事にへだてられることがあっても、念仏の中に仕事をする。ときに妄念のためにへだてられることがあっても、慙愧しつつ念仏申されれば、みな常念相續の人と言ってよい。上人の門下の時代になって、一念義多念義の争いがあり、それらの中にはとかく信と行といずれか一辺に偏した議論があったようである。

七 すべての仏のご本意にかなう

先には諸仏の中で、ただ阿弥陀さまだけに帰依したてまつる意味を叙べられたが、また別に言えば諸仏同道であり、すべての衆生をお救いになる本願の仏阿弥陀さまと、その本願をお説きになったお釈迦さまと、またその説法を証明された諸仏とを挙げて、浄土宗ではこれを三仏と仰ぐのである。浄土の三部経すなわち『無量寿経』・『観無量寿経』・『阿弥陀経』はそれぞれ三仏の御ところを説いているのである。この三仏のご本意にかなうことを悦ぶ一段である。

阿弥陀仏は不取正覚の言を成就して、現に彼国にましましては定で命終の時は来迎し給はん。

この文は『無量寿経』のころをもつて述べられたのである。阿弥陀如来がまだ仏となりたまわず、法蔵と名告る菩薩の位にあつて、やるせない平等の大悲から四十八の広大な誓いを立てられ、一一の誓いに「わが願のごとくならないならば、その間断じて無上のさとりを成就せず、仏にはなりませんまい」とさとりをかけて堅い願望をあらわれたお言葉がある。第十八願の文に見るならば「浄土の往生をねがって念仏するもの、一人でも往生かなわぬということがあつたならば、断じて仏にならない」とお誓いになっている。またこの経には「法蔵菩薩いま已に成仏して阿弥陀仏となり、現に西

方にまします」と釈尊は阿難の問に答えられて毫末の疑いもなからしめている。菩薩がすでに成仏して阿弥陀仏となり、いま現に西方浄土にましますことは、何ものにもまさるすくいの確証でなければならぬ。善導大師も「かの仏いま現に極楽浄土にましまして成仏したもう。深重の大悲からさきに発されたお誓いは決してむだ事でなかったことが確認される、このゆえにいかなる衆生も称名念仏すれば決定して往生する」といつて居られる。法然上人が『往生礼讃』に出るこの文に対し、しばしば感涙にむせばれたことを聖光上人は語り伝えておられる。

このように現にまします仏とされることは、救済の仏として信仰する上に重要なことである。『無量寿経』には遠い過去に五十三仏が出られ、次いで阿弥陀さまが出現されたことが説かれている。上人は阿弥陀さまの本願成就ということ、『選択集』などに特に力説しておられる。本願は過去世法蔵菩薩であられた時の単なる理想であつたのではなく、一々にみな成就して今ここにはたらくすくい力としてその意義を重視されたのである。阿弥陀さまは大悲にみちて不断に私どもに向つて摂取の力を与えて下さる生ける救済の仏として実感されたからである。「定めて命終の時は来迎し給はん」

とあるのは、第十九臨終來迎の願のころである。

釈尊は、善哉我教にしたがひて、生死を離る（と）知見し給ひ

ここは広く諸經にわたるとも言えるが、特に觀無量壽經のころをもつてお叙べになったのである。觀經にはひろく往生の行が説かれ、心を沈めて仏や淨土を觀する法と、また日常心のまま修するさまざまな行善に及んでいるが、經の終りには、それら諸行をさしおいて本願念仏の一行を永く後の世に伝えるようねんごろに阿難尊者に付囑されている。このことから釈尊は、わが教えを信受して念仏の行者が永く生死のまよいを離れることができるのを、さぞかし悦んで智眼をもつて見そなわすことであろうと述べられたのである。上人が念仏往生のおしえをもつて釈尊出世の本懷と信ぜられたことは、『三部經大意』、『津戸三郎へつかはす御返事』にも見えるところである。

六方の諸仏は、悦哉我証誠を信じて不退の淨土に生ぜむと

悦（び）給（ふ）らん

この文は『阿彌陀經』のころをもつて、諸仏のご本意にかなうことを示されたのである。この經には釈尊が彌陀淨土の莊嚴功德と、往生の行として念仏を説かれ、後半には釈尊

の説法の眞実なることを、六方の諸仏が証明し護念したもうことが説かれる。また經の終りには、釈尊が淨土に安住されることなく、この濁惡の世界に出現されて無上のさとりを成就され、しかもこの世間の人に難信の法とする念仏往生のおしえを宣布されることは、まことに甚難希有のことと諸仏が稱讃したもうことを説いている。「難信の法」はチベット訳によれば「世間にたぐいなきみ法」であり、最勝の法と申すべきであろう。また六方諸仏の証明をば、經には「諸仏みな広長の舌相を出して三千大千世界を覆う」と神秘にあらわされているが、常恒の説法とも申すべきであろう。「不退の淨土」とは、まだぼんのうを断ちきれない凡夫であっても淨土に往生すれば、もはや退轉する縁がなくなり、向上の一路を進んでついに成仏に至るのであり、これを処不退といっている。

『阿彌陀經』も三仏のご本意が一つであることを明したものと云えるが、御消息のこの一段は三仏同道のころをもつとも明かに示されたものである。『選択集』には十六章全体を結んで「彌陀釈迦諸仏、同心に念仏の一行を選択す」とあり、また阿彌陀仏信仰を中心として三仏みな同入することであらわしている。仏陀觀の上にも統一があり、純化を求めることは大切であろう。



寿命院にて

——松 本 国雄——

作家（鎌倉市在住）

今年の正月四日からNHKは、「天と地と」のあとをうけて、いわゆる大河ドラマと称する「樫の木は残った」という山本周五郎原作のドラマを放映している。

私は、仙台からさらに四〇キロも奥地、仙台と平泉の中間に位置する寒村に生れ、そこで少年時代を過ごしたのだが、村の旧家である寿命院という宗家にしばらく寄食させられたことがある。

寿命院は仙台六十四万石、伊達家の末寺だったそうで、その当時は黒塗りの木枠に組み込まれた立派な築地風の塀にかこまれ菩提樹や、ふたばにしてかんばしいと云われる、せんだんの太い樹木にかこまれた鬱蒼とした森の中にその「寿命院」という小さな古い寺があった。

天台宗派に属するこの寺は、当主だったSさんは聖護院という名利に修業し、ちゃんとした僧位をもちながら、僧職は殆んど廃業していたようであった。

しかし、朽ちかけた本堂には五百羅漢をはじめ、黒々と、あるいは金びかな仏像が居並び、夜などはこわくてとても近づけない恐ろしいところだった。それでも春秋には大掃除をして護摩をたいて浄めたものである。

その寿命院は仙台藩の忠臣といわれている政岡の遺品と称する食器や家具調度品などが保管されていた。つまり春秋の大掃除と浄めの行事には、それらの品々を虫ぼししたり、

仏画刀剣のたぐいの、手入れがなされたのである。

仙台萩に出てくる政岡とはどんな歴史上の人物であったか、しかも男か女かもよく弁別しない少年時代のこととて、大切そうにふくさなどに包まれて桐の箱に収められている、食器お椀のたぐいをみても、ただなんとなく古いもので大事なもののなのだろうというぐらゐの感懐につきる。ただ私などが非常に興味をもったのは、古い物置の奥にあった刀剣類がぎっしりつまった長持ちであった。

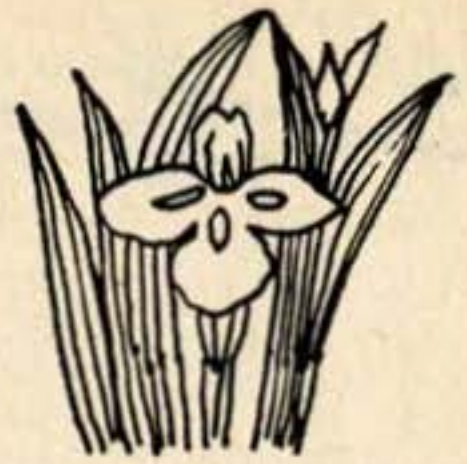
そしてこっそり、しかもこわごわほこりっぱい物置にしのび込んで、ギギギギと音のするその長持ちの蓋をあけて、黒塗りや朱鞘の刀をとり出して、刀身を抜いてみたり、かまえてみたりするのだが、子供の腕にはとても重くて、絵物語りや活動写真などに出てくるさむらいのように、自由に刀を振りまわして敵と戦うことなど、ほんとうに出来るのだろうかとおもったものである。

あるとき、その一振りをこっそり外へ持ち出して、裏山の孟宗竹の林にゆき、いきなり抜き身で竹に斬りつけたが、竹はきれず刀だけすべってケガをした記憶がある。

こうして、とうとう、小坊主は生れなかった。その物置には、いろいろな文学書がたくさんあったためである。その頃、私は鈴木三重吉を愛読した。童話や千鳥という小説のなかに自分をとけ込ませて小さなロマンスにひたった日が追懷される。

そしてうっすらと粉雪が降る夜などは、河原のせせらぎの音が耳について、なかなか眠れないこともあった。

私に宗教的なドグマの崇敬さを与えてくれた少年時代、いや幼年時代の奇妙なそのような一時期は、骨肉の一部として今もその形成の一部をなしているもののようにである。



△念仏生活▽

第五回

—五重相伝のお話し—

藤井実応

五、四重 決答授手印疑問鈔

(一) 伝 灯 分

△本書の縁起▽三祖良忠上人が、二祖上人より御伝法をうけられてから満二十年の後、五十九才、康元元年(一二五七)正月十七日に、上総国周東に在阿という人(天台宗の学者)があつて、「授手印」及び「念仏名義集」(二祖の著書)に依つて念仏門に入つたのであるが、授手印中に、いろいろの疑問を抱き、訪ね来たので、上人はそれに対して一々お答えになつたのを二巻とせられたのが、この決答授手印疑問鈔であります。

(二) 正 説 分

在阿は二重の授手印についての疑問を、お尋ねして、三祖からはっきりとお答えを頂いて、疑いの胸もからりと晴れわたり、一点の雲なき青空の如く、澄みきつた水のように、「念仏申せば、阿弥陀仏の本願によつて、必ず助かる」と、明瞭に決定せられたのであります。即ち三祖上人より「一点も疑うに及ばぬ」と御証明を頂かれて、わきめもふらず、念仏一筋道を進むことになつたのであります。それでこの四重の教は、これを証と伝えるのであります。

在阿は学者ですから、たくさん(疑問八十一)を提出したのですが、その中で私共念仏者の日常生活に最も関係の深い問題があります。それは「み教によつて、念仏して明るい生活をし、浄土に生きゆこうと願うて(願生心)いるのに、

相変らずこの世の貪欲むさぼりや瞋恚いかりの心が強くて、願生心は弱く覺えるのは、何故であらうかということです。それに対して、三祖上人は「貪欲は昔の昔から慣れ習うてきた法であるから強い、願生心は、今生こんじょうにはじめて励ます心である故弱いのである。二河白道の譬をよくよく見合せなさい」とお答えになつております。

二河白道の譬は善導大師が「觀經の疏」の中に、御自身の体験をとおして、信仰の進み、念仏者の歩みを、譬をもつて示されたものであります。法然上人も「選択集」に、その譬を全部引用されております。その譬を自身にあてはめて考えてみましょう。

旅人（念仏者）があつて西に向つて（西方極樂）行こうとすると、忽然として、南に火の河が燃え（瞋いかりの心、憎惡にくしみの心）、北に水の河（貪欲の心、愛着の心）が流れているのが見えた（信仰にめざめると、おのずから深い反省がなされて、自らの貪瞋に気づく）。二河の長さ百歩（百才の寿、人の一生）、その深さは、はかることができないほどである（貪瞋強盛）。中間に一つの白道がある（貪瞋煩惱の中にありながら、能く清浄な願生心を生ずる）。白道の広さはわずか四五寸ばかりである（願生心の弱さにたとえる）。水火の二

河交々こもこも白道を犯し休むことがない、足を踏み出すにも、有るか無いかの道であるから、ただおしなべて河ばかりのように見える。前はこの険しい路、後には群賊惡獸（五欲、十惡が競い來つて殺そうとする（誘惑）。この人、進退きわまり、自ら思念かんがえするに、退くも死、進むも死、住とどまるも死（三決定死といわれる）、何れにしても死はまぬかれぬ、われはむしろこの道をたづねて前進しよう、すでにこの道がある、必ず度ることができよう（死をまぬかれなないと、自己のすべてを投げ出された時が大光明に接した時である。ここに信心決定する）、この時に東の岸に人の声あり（釈尊）、「ただその道をゆけよ、必ず死の難はないであらう」と。同時に西岸からは（阿彌陀仏）「汝一心に、正しく念じて、道をたづねて直ちに來れよ、われよく汝を護らん」との声を聞いた。是を聞いて、さらばと思ひ立ち、道は危いけれども「ゆけよ」「來れよ」の声を力として、二河を顧みず白道を進んだ。後方から群賊惡獸が「その道は危い、帰りなさい、われらは君を害するものではない」という声を聞くが（相当信仰が進んでも誘惑がある）、耳をかさず、一心に直進して、間もなく西の岸に着いた（浄土に往生）慶よろこび、喜よろこぶこと限りがない。という譬であります。譬ではあるが、実によく求道信仰の歷程が明

に示されているのであります。

入信しても浮世の風は相変らず吹きよせて来ます。人生は苦悩に満ち、矛盾だらけです。苦悩矛盾のほかには人生はないともいえます。受くべきものは正しく受けて、逃げようとはしません。笑われようと、さげすまれようと、困難であろうと、心配なことであろうとも、受くべきは正しく受けて、念仏のみただ一筋の救いの道であると、矛盾の只中に白道を進むのであります。念仏のあるところ、矛盾は矛盾のままに念仏に統攝せられた生活となります。浮世の風は荒いが、念仏者には心の奥の奥まで照す阿弥陀仏の光明によって護られ導かれてゆきます。

「人目をかざらずして（至誠心）往生の業を相続すれば（念仏相続、白道を歩む）自然に三心は具足するなり。たとえば葦のしげき池に、十五夜の月の宿りたるは、よそにては月宿りたりとも見えねども、よくよくたちよりてみれば、葦間をわけて宿るなり、妄念の葦はしげけれども三心の月は宿るなり」（法然上人、諸人勸化のお詞）

どぶどろの中にも月かげが宿っている。世間の塵にまみれて、妄念だらけの中からの念仏であるが、それは濁りから出て濁りにしまぬ蓮のように、阿弥陀仏の絶対なる本願力のお

はたらきによって光明に獲られ導かれて、明るく力強く精進ができる、それは明けゆくよろこび、育ちゆくよろこびであります。暁のよろこびです。念仏のない生活はいかに明るく、はでやかであっても、やがて暮れゆくさびしさがあります。念仏相続の生活は、現在たとえくらいすがたがあらわれていても、心の奥底には、如来よろしきにはからいたもうという、まかせきった安らかさがあり、またやがて明けゆくよろこびみがあります。どんな憂きこと、悲しきこと、困ったことがやって来ようとも、南無阿弥陀仏と正しく受け、南無阿弥陀仏と力強く処してゆく、南無阿弥陀仏の一すじの道、わが真に生きゆく道は、このほかになしと、もはや一点の疑もなく、南無阿弥陀仏の白道精進することとなります。これが四重「決答抄」の教の意であります。

六 第五重 ほんにうほうど 凡入報土の伝

「往生論註」曇鸞大師作

（一） 総 説

第五重は、念仏の信により罪が滅することと、単信口称の

勝方便（十声念仏のこと）を伝えるにあります。この伝は、中国浄土教の初祖曇鸞大師の「往生論註」に依って、一念十念の念仏が、よく多年の造罪を消滅せしむる所以を明かにし、念仏の力用（はたらき）を確信せしめるのであるから、これを「信」と伝えます。またこの第五重を口授心伝とか、擬思（ぎし）十念伝と申すのは、五重の最後に行われる森嚴なる儀式の下に伝灯師から五重の受者に直々これを伝えることになっているからです。

（二）伝灯分

曇鸞大師（四七六―五四二）は北魏の人で、中国における浄土教の初祖と仰がれています。五台山にて出家し、四論宗を究められた。後に不老長生の法を求めて江南の陶弘景を訪い、仙經をうけて、北方に帰る途上、洛陽において、菩提流支三蔵にあい、觀無量壽經を授かり、釈然と反省開悟するところあり、携えていた仙經を焼き棄て、浄土教に歸せられた、五十一才の時です。是より自行化他、念仏を弘通せられ、衆人の歸依をうけ、特に魏王は深く歸敬し神鸞と崇められました。晩年、汾州の玄中寺に住せられたので玄忠大師とも称せられます。その著「往生論註」は天親菩薩の「往生

論」を註解せられたものであります。

（三）正説分

「論註」に「業（行為）のことを説いた經には、業道は秤の如くで、重いものが先ずひくとある、然るに觀經には、五逆十惡という大罪を犯した人々も命終の時に臨んで南無阿彌陀仏と称え十念具足すれば、便ち（すなわ）浄土に往生でき、永く三途（地獄・餓鬼・畜生）の諸苦を免れる」とある。何ゆえ業道の經と觀經とその意が相違しているのでしょうか。（この問は、五逆十惡の罪は重く、十念念仏は軽いものと考えての問いである。）それに答えるに念仏と罪業との輕重を校量（かくりやう）するに三義ある。この三義によって、五逆十惡の造罪よりも、念仏の功德が重いから、念仏にひかれて往生ができるのだと明に答えられてあります。その三義とは、

（1）在心 念仏と造罪とは心の用（はたら）きがちがいます。念仏の十念は善知識（仏道に導く人）が方便安慰して、阿彌陀仏実相の法を聞かしめたから生じたので、それは実であります。それに比して造罪は、虚妄顛倒の迷える見（かんが）えによって造罪した虚なるものであります。実と虚とはくらべものにならぬ、たとえば、千年の長い間閻（えん）であつた室（へや）でも、光がちすと忽（たち）に明る

くなるようなものです。千年も闇くらかったから千年も経なければ明るくならぬなどということはありません。虚たる造罪を積み重ねても、実たる如来本願の念仏によって、忽ち罪は滅し、往生しうるのであります。

(2) 在縁Ⅱ造罪と念仏とは、所対の境が異なります。造罪の人は自らの妄想心から、同じような煩惱虚妄の衆生が相手となり、縁となつて、罪を造るのであります。十念の念仏は無上の信心によつて称えられたのであり、阿弥陀仏の清浄な無量の功德名号、本願力の強い縁から生ずるのであります。虚妄の衆生と絶対なる如来と比することはできません。それゆえ一念十念の念仏によりて往生をうることができるのであります。

(3) 在決定Ⅱ造罪の人は有後心、有間心とて、思い立つても、やめようかと思つたり、何とかなるであらうと思つたり、罪を造つた後も、慙愧の念を起したりする間すまあるの心で罪を造るものであります。しかるに臨終の十念は無後心、無間心とて、念仏申すほかに全く道なしと、思い返す心もなく、唯々仏の願力を仰いで相續するのであります。それゆえ往生することができるのであります。

以上の三義、在心（弥陀の心にしたがい）、在縁（弥陀のお

かげで）、在決定（このほかに全く道なしとの覚悟で純一相續する）によつて、念仏の重き所以を説き、重きもの先づ索もといて、往生することができるのであると、業道経と觀經と一致する旨を示されたのであります。

觀經に「声をして絶えざらしめ、十念を具足す」とあり、声が本体であることが示され、十念は十声であるから、十べん念仏申すことを「お十念」といつて実行いたしております。この十声は満数の意ですから、一念でも三念でも、五念でも、この人のその時にできるだけ申せば、それが満数にて、具足十念といえます。十念具足すればそれにて業事成弁する（往生の業が、それで成しとげられる）といわれます。即ち一念、三念、或いは十念にて、業事成弁して往生することができるのであります。しかし十念と經にあるから、十声の念仏を無間心にて申したい場合（数を数えないで淳一の心で念仏が十べん相續されるには）、また一つの勝れた方便（正しい方法）がある。それは「必ず口授すべし、之を筆点に題することを得ざれ」（論註）とあつて、なかなか文章などで述べがたいから、儀式の時に口授することになっております。

生涯悪業をつみ重ねて来た極重悪人も、一念十念の口称念仏によつて、最高の眞実報土（極楽）に往生ができる、即ち

一切の衆生悉く往生ができるという大慈悲の究竟きやうきやうの宗教であります。それを凡入報土（一切の凡夫が最高の浄土に往生ができる）と申し、それを明かにせられたのが法然上人の宗教であります。その精神は印度・中国・日本とそれぞれの祖師方を通して相伝せられて来たので三国仏祖伝と申すのであります。

念仏者はいつも如来のおかげで、そのお守りお導きを頂いて、日々の生活がなされる、それゆえ寝る時には十念して如来のお慈悲の中に寝やすませて頂く、目がさめれば、今日も如来みめぐみの中に生かされると、十念してよろこび起き上る、食事しょくじも念仏の中に、仕事も念仏の中に、人との応待、その他清掃洗濯等生活の一切が念仏の中に行われて念仏に統一された、明るい力強い安らかな生活が展開されてゆきます。このよろこびは有縁の人々に頒ちたくなります。同じ如来のみ光の中に共に生かされ生きゆくようと念願します。まことに選択本願の念仏は、この世、後の世、現在より未来永遠の救いであり、一切の人々と、如来光明中に共に生きゆく道であります。

「生けらば念仏の功積り、死なば浄土に参りなん、とてもかくても此の身には、思いわずらることぞなし」と知りぬれ

ば、生死共に煩いなし」

「この書きおきたるものを見て、そしり諦あきらぜんともがらも、かならず九品のうてなに縁をむすび、たがいに順逆の縁むなしからずして、一仏浄土の友たらん」（法然上人）



《附》 五重のまとめ

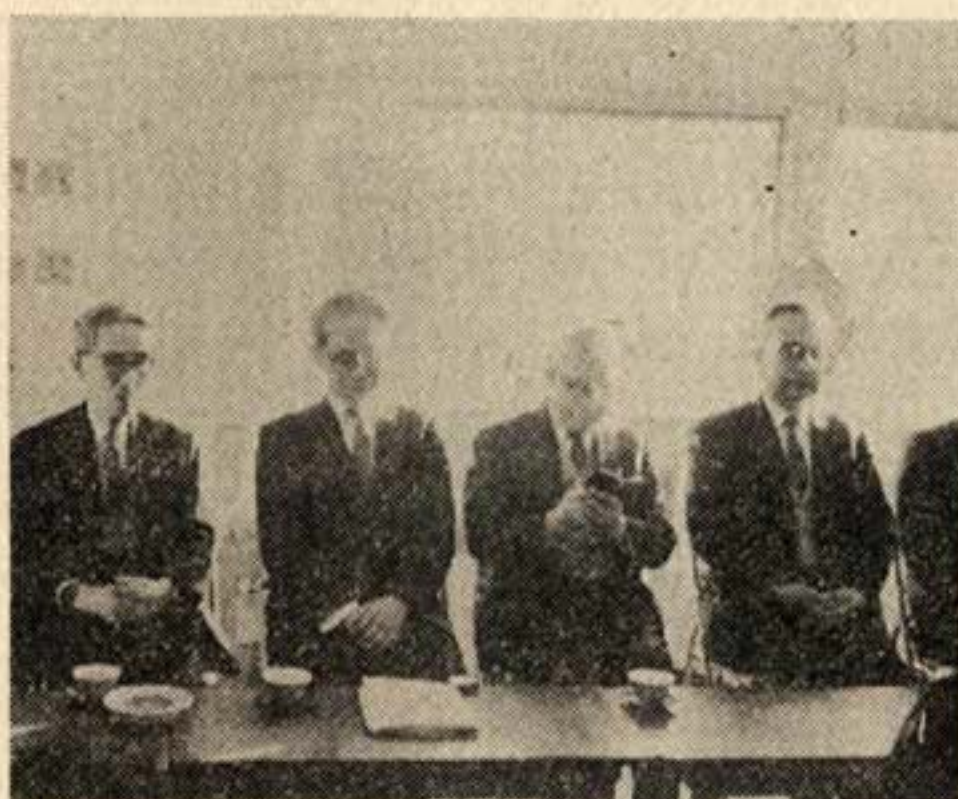
初重—機—私ごとき愚かなものにて—往生記—元祖
二重—行—南無阿弥陀仏と称うれば—授手印—二祖
三重—解—きつとお救い下さると—領解鈔—三祖
四重—証—もはや一点の疑もなく—決答鈔—三祖
五重—信—ただ南無阿弥陀仏と決定す—十念伝—唐祖
（念仏生活となる）

五重と一枚起請文

浄土宗の相伝を、いろいろと談じ、学しても、所詮は「一枚起請文」に習い収める、これを故実とし、至要といたします。（増上寺開山聖聰上人—安心請決略抄）

チャンス到来

仏恩報謝の聖戦へ



＝ 3月6日の会合風景＝

岡 本 薫
(横浜市神奈川区在住)

Ⅱ 爆発した国民の怒りⅡ

僧侶が意気地がない、仏教徒は墜落している、などという。そういわれても仕方がないかもしれないが、「それでも仏教はなんの役にもたたないと放言したものは一人もない。

しかるに創価学会は仏教無益、釈迦死仏を宣伝し、しかも自己の宗教を仏教と称している。かかる大矛盾の教学は恐らく有史以来初めてであろう。

「猫に小判」で、頭の狂ったものには仏教のすばらしさが分らないかもしれない。それはそれで仕方がないが、その役にたたないという仏教の一經典である法華經の方便品と寿量品を日夜読誦している「勤行要典」の中に組みいられているのであるから、なんともかんともお話しにならないほどの狂い方である。

私は生れてこのかた、これほど憤慨したことはない。「悲憤慼慼怒髪天を突く」の思いである。一念こって「狂信創価学会を裁く」「国法を侵した創価学会」「宗教と政治」等の冊子を自費出版し、広く歩いて破邪顕正の講演もした。

しかしながら今の日本においては、宗教界と文化人（政界人を含む）との間に深い断絶があり、われわれが生命を賭しても護持せんとする仏教ないし宗教に対して、文化人は関心がうすいのである。宗教法人の番人であるべき文部省すら手をこまねいている始末だ。政治家はおべっかをつかい、ジャーナリズムも沈黙を守っている。それをいいことに悪魔はますます謀略の手をのばすという始末。

だが、「天網恢々疎にして洩さず」はやっばり真実であつた例の藤原弘達氏の著書の出版妨害事件が明るみに出るや、堰をきって水をおとすが如き勢いをもって、破邪顯正の大洪水が日本国中にみなぎってきた。つもるウツプンが一度に爆発した感じである。政党人も文化人も報道人も「チャンス到来」とばかりに長年の沈黙を破ってチンチンガクガクだ。

これこそ私の待望していたことであり、仏の常住不滅はものの見事に実証された。このチャンス逸すべからず、仏のお世話になったものは、今こそ立上って民衆に正法をおしえろと共に邪法の邪なるゆえんを知らしめて、仏恩に報い奉らなければならぬ。

殊に「三世の諸仏はみな念弥陀三昧により感覺を成ず」(般舟三昧經)といわれるほどに尊き念仏に帰依したものの責任は重大であり、各教各宗の先頭に立って破邪顯正の実をあげなければならぬ。

破邪の着眼

去る三月六日に、われわれは竹中博士の自坊に参集して破邪顯正の決意を表明した。しかし創価学会を専門に研究したものでなければ、最後の解決をみることはできないであろ

う。国会における各党の攻撃では生ぬるい。もったときめ手になるものがある。それは①各教各宗をすべて邪教と攻撃したことが、憲法二十条及び宗教法人法への挑戦であること。②彼の思想にはいくつかの憲法や法律に違反したところがあること、③そのような宗教団体は宗教法人法第八十一条の解散条項に該当するだろうということ。

われわれはこのような着眼をもって運動を展開しなければならぬと思う。私はすでに民主社会主義研究會議発行の月刊「改革者」の二月号に批判の原稿をのせて、第二次の聖戦に突入したが、数ヶ月批判をつづけた後には、一冊の本にして広く国民に訴えたいと思っている。今こそわれわれは教祖釈尊の次の金言を堅持すべきである。

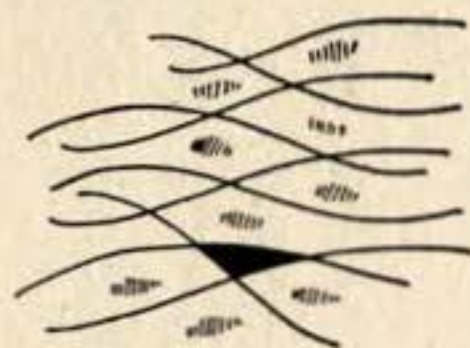
若し悪を見ても遮せずんば非法便ち増長すべしすなわ(金光明最勝王經)

戒破し正法を壊する者有るを見ば、即ち驅遣、訶責、挙処すべし。若し善比丘、壊法の者を見て、置きて驅遣、訶責、挙処せずば、当に知るべし、此の人仏法中の怨なり。若し能く驅遣、訶責、挙処せば、是れ我が弟子、真の声聞なり(同上の經典)

仏法の怨となつては到底浄土往生は不可能であらう。

聖典物語

カピラ城の滅亡(5)



た る つ
せん さん

「大王は、何事を願ひ給いますか。思いのままに申されよ。外でもないあなたの申されること、必らずきき入れましょう」

「どうか、わたしが水中に没してから出てくるまでの間、人々が城を出ることをゆるされよ。わたしが水中から出て来たならば、大王の思いのままになさるがよい」

「よろしい、あなたの願ひを許しましょう」

るり王には、まだ人に情をなさけかける善意が残っていたのかも知れません。或は水底にもぐるのは、ほんの僅かの間である。その間に城を逃れ出る人数とて高が知れたもの、そう考えたのかも知れません。

るり王の許しを得ると、摩訶男は何を思ったのか、つかねていた頭髪をさばき解き、池の中へ深くもぐって行きました。

その間に城中の人々は、着のみ着のまま命からがら算を乱していくつかの門から城外へとのがれて行きました。この時、或る者は遠く西へ向って走り去り、阿難の一族らはネパールまで逃げて行ったと伝えられています。既にカピラ城に火を放たれたのか、炎々と焰を吐いて燃え上っていました。池の中にもぐった摩訶男は、なかなか水面に浮び上って来ませんでした。

ふと気づいたるり王は、いぶかしく思ったのか、

「摩訶男王は、水に入ってなぜこうもおそいのだろうか？」

誰か地中に入ってしらべて参れ！」

と命じました。

長い時間、浮んで来ないのも道理でした。水にくぐった摩訶男は、さばき解いた頭髪を、樹の根にしっかりとわいつけ

ていたのでした。なぜ池中に樹の根があったかといひますと、はるか以前のこと、お釈迦さまの説法をきくための講堂を建てた時、その池にあった大木を切つて用材とし、根を掘り起して地中に捨ててあつたのでした。

既にこときれていた摩訶男は、地上に運び出されて来ました。いたましい姿を眺めてるり王も良心の呵責に責められ、身命を惜しまなかつた摩訶男の崇高な覚悟のほどに深く心を打たれ、

「王は、已に命終されてしまわれた。これは、みな釈迦族を愛されたからである。わたしは、王が死を覚悟されていることをつゆ知らなかつた。……もしそのことを先に知っていたならば、わたしはカピラ城を攻めはしなかつたのに！」

とさすがの王も、悪夢から醒めたように愕然として、いたましげに述懐いたしました。

そして、大軍に向つてこう敕命を下しました。

「もしまた釈迦族を一人でも殺害する者があつたならば、軍法を以つて厳しく処罰するぞっ！」

やがて、るり王は感慨深げに大軍を引きあげさせ、舍衛城の城門の近くにさしかかつて来たとき、どこからともなくきこえてくる妙なる伎楽の音に象を止めさせ、耳をそばたてま

した。笛や鼓ではやし立て、讃歌の類の甘美な楽しそうな歌声がしきりに聞えて来たのでした。

「一体、あれは？　ここまで聞えてくるあの歌声や楽の音は何ごとであらう？」

と侍臣に問いました。

「あれは、まさしく祇陀太子さまが殿中に於て伎楽を奏し樂しまれているのでございます」

須達多長者が祇陀太子の園林を多額の金額で買い求め、二人の協力で祇園精舎を建ててお釈迦さまに献じたことは有名な話です。

るり王は、侍臣の答えをきくと、

「太子のところへ、象を走らせっ！」

と御者に命じ、荒々しく象の足音を立てて太子の宮殿へと向いました。

太子の宮殿の門を守っていた番兵は、遙かにるり王がこちらへ来る姿を眺めて、王の傍へ走り寄り、

「大王よ、もう少し徐行なされよ。いま殿中では、太子さまが樂を奏して樂しまれている最中なのでございます。もう少し静かに象を御されよ」

と注意を促がしました。

「何っか！ 王に向つて、おのれ不遜なことば！」

立腹した短気なるり王は矢庭に剣を抜いたかと思うと、番兵を其の場に斬り捨てました。

一方、祇陀太子はるり王が門外まで訪ねて来られたことをききますと、奏樂を中止させずにそのまま奏さしめて置いて、門の外まで出ていんぎんに王を迎え、

「よくぞ来られました。殿中に入られて、しばし御休憩下されよ」

と尊敬の念をこめて誘いました。

すると王は眉をひそめて不快そうに、

「太子よ、今日わたしが釈迦族と戦つたことを知りませんでしたか」

と詰問いたしました。

「わたしは、よく知っております」

「それならば、太子は何故に妓女と遊び戯れておられながら、わたしを助けて下さらなかったのです？」

「わたしは、カピラ城の人々をいささかも憎んではいません。まして戦によつて、人の命を殺めるにしのびませんでした」

その答えに、るり王は一そう眉をくもらせました。その

時、宮殿からあそびめの楽しそうな笑い声が突如爆發して聞えてきました。それがるり王の心をやたらにいらただせ傷けました。

猜疑心の強いるり王は

（太子はわたしを助けもせずにのんきに妓女と遊びたわむれている。万一、わたしが今日の戦に討死していたら、王位を必らず奪うに相違あるまい）と思つたのか、一瞬ただならぬ顔色となつたかと思うと、憤怒にかられ利剣を抜き放つて太子に迫りました。祇陀太子は、すこしも恐れず顔色一つ変えずに笑をふくんで、刃を受けました。

お釈迦さまの弟子たちが、祇園精舎に帰られたお釈迦さまに、るり王がカピラ城の人々を惨酷な殺し方をしたことや、又、祇陀太子を殺めたことなどを申しあげると、

「るり王はおろか者で、惡逆無道である。今日より後、七日の間に衆生ひとびとを害した罪を自ら受けるであろう。他を犠牲にして己のみそのまま勝手気ままに生きることがは許されないものである。必らず劫罪を受けることは、まぬがれ得ない。猛しい業火の火焰が燃え出でて、王や家臣をまといつつみ、王の血統は絶えるであろうとおっしゃいました。」

お釈迦さまのいわれたことを伝えきくと、るり王はおそれ

おののいて、群臣に告げました。

世尊は、王や家臣等は七日の間に業火に逢うて滅びてしまふと予言されたそうである。

汝等は盗賊を徹底的に取りしまれ、又、国境の監視を厳重にせよ。水難や火災の起らぬように厳しく命ぜよ」

王のことばをきくと、侍従の好古はからからと笑って、

「大王よ、恐れたまうな。大王の威光におそれ、外から攻めて来る敵などありません。まして、水火の災など起るはずはございません。」

大王、そんな心配されるより、日日を快く楽しまれよ」とすすめました。

「いいや、好古よ、知るがよい。世尊には空言はない。わしは外の苦みは心につけぬが、ただ火で焼かれることを恐れている」

るり王は、不安にかられていました。

ところが、その後は不吉な兆候も現われず何の変ったことも起らずに、早や七日間もすぎました。こおどりするほどよろこんだ王は、多くの兵に守られ、好古を初め侍臣や沢山な美しい侍女をつれてガンジス河に行き美しく装うた船を浮ばせ、楽を奏せしめて船遊びをいたしました。太陽のきらめく

日でした。船は水面にゆるやかに、ただよっていました。

「わしは、水辺にいる。いかなる火も、ここへは襲うて来ることは出来まい」

るり王は、我が世の春と安心しきっていました。

夜は船に灯をともし、河面に万灯を照り輝かせて歌い舞わせて悦楽に耽っていました。

ところが、その夜半、星空に急に黒雲が起り空一面に広がり、雷鳴をともし、豪雨が降り出し、やがて莊麗を誇った舎衛城のるり王の宮殿は落雷のため焰を吐き初め、火は風にあおられ見る見るうちに燃えひろがりました。

ガンジス河に降りそそぐ大粉の雨は水煙をたて、河は次第に水かさを増して行きました。河面は狂ったようにうずを巻き、船は木の葉のようにもてあそばれていましたが、あつというまに、るり王や家臣をのせた豪華な船は転覆し、大きなうずを跡にのこして濁流に吞み込まれてしまいました。

釈迦族の滅亡といういたましい出来事はお釈迦さまの御入滅前七年か、遅くとも二年前頃であったといわれています。さしも強大な勢力を誇っていたコーサラ国は滅亡し、其の後、阿闍世王のためマカダ国に合併されてしまいました。

(了)

道

比叡の道

高橋良和

比叡の山の残雪は四月になっても谷間にどす黒く残っている。四月四日からはじまる東塔根本中堂での御修法のとき、よく西塔まで足をのばすと、釈迦堂や常行堂、法華堂あたりの日かげには黒くなった残雪がところどころまだそのままである。西塔でもこのあたりは、やはり日のあたる場所ではないらしいが、それとは反対に、西塔釈迦堂の左側、るり堂の前を通って黒谷青竜寺への道は、もう雪が溶けて割合に日あたりのよいところである。

歩いて二十分ぐらい、若い人なら十二三分で行くことができるかもしれないが、この釈迦堂から山の肌の道を割合坂も少なく下ってゆくと、そこに元黒谷青竜寺がある。

道はそう峻しくはないが、この寺の門前の五十米ほどはなかなかの急坂で、おりてゆくのは足を踏みはずさないように気をつけねばならない。それと反対に、今度かえるときは胸

つき八丁といわれるようなきつい坂であるから、その道のすぐわきにこの頃縄を張ったわき道が一本つくられているので、それをたよりに登ると、まあなんとかのぼれるのである。法然上人はこの道を往来して、西塔の釈迦堂、法華堂あたりにいつも出かけたであろうと思うと、この道の小石一つにも祖師法然上人のわらじのあとを踏むような親近感をおぼえるのである。

この道は最近知恩院の青少年修練道場がつくられたので、ジープが通れるように広げられたのであるが、ジープが通るのは盛夏に行なわれるおてつきこども奉仕団が宿泊しているときの、食量運搬のときが多いようである。

この道の途中、曲り角をまわったところに十数個の墓石群がある。おそらくこの北谷で亡くなった山の高僧や、名僧の墓碑であろうと思うが、そのなかに南無阿弥陀仏と刻まれた

二、三の墓もある。一度ゆっくりと墓碑の一つ一つを調べた
いと思うが、この地にも念仏の信奉者がいたと思うと、うれ
しい気がするのである。

この墓石群より少し手前にるり堂がある。まことに小じん
まりしたお堂であるが、瑠璃というのは薬師如来の浄土をあ
らわすのであるから、薬師如来を本尊としている。

それは元亀二年九月十二日のことである。比叡山が大名浅
井長政に加勢したということで、織田信長が憤慨して、全山
の堂宇を焼き打ちにしたときに、西塔、本堂、横川のお堂は
悉く焼失したなかに、このるり堂だけが一つ残った由緒ある
お堂である。るり堂の創建年代はわからないが、室町時代末
期の建築であるといわれている。ここから少しはなれたとこ
ろに武蔵坊跡という弁慶が住んでいたお堂の跡もある。

これは西塔の傍に住む、武蔵坊弁慶にて候、われ宿願の仔
細あつて五条の天神へ丑の時詣で仕り候、今日満にて候程
に、只今参らばやと存じ候。

と、謡曲「橋弁慶」や「正尊」にも出ている。

この前を通って、さっきの北谷の墓を通ると、青竜寺の門
の前に出てくる。この西塔の出てくる謡曲に「摂待」という
のがあるが、これは山伏のことを謡ったもので、今でもこの

あたりのお堂に修験道本部の看板がかかっているので、昔は
山伏の修行の場であつたようである。

法然上人がこの青竜寺に隠遁したのは十八才のときであ
る。それから四十三才の立教開宗までこの青竜寺に、ひたす
ら勉強研修の日をおくるのであるが、各宗の祖師のなかで十
八才で隠遁、二十五年間もその生活をつづけたのは法然上人
だけではないだろうか。この黒谷で慈眼房叡空という名僧の
下に入るのであつて、ここからいつも西塔から、東堂に出か
けるととき、歩いた道が、この道なのである。その様子を佐藤
春夫の「極楽から来た」の小説ではこう書いている。

彼は青竜寺を出て、南に向う門前の道を、釈迦堂、浄土院
の伝教廟前を経て、大講堂前を根本中堂、東塔から、大宮
川上流の谷を見下ろしつつ、北の青竜寺門前に向うという
コースを楕円形に一周するのが常であつた。

と、この彼というのが若き日の法然上人なのである。

そして法然上人がこの青竜寺の門を出るにあたっては、
「保元の乱の後、為義が斬れた前日の一夜をこの門前にたた
ずみ明かしたと聞いた」うわさを思い出したようである。

二十五年住んでいたこの青竜寺は、法然上人の遺跡のなか
では、一ばん長い期間であり、そして一ばん情熱を燃やし

た、青年法然にとって忘れがたいところであったのである。

浄土宗では、この青竜寺のことを元黒谷と呼んでいるが、これは浄土宗だけのことで、比叡山では、別所黒谷といっている。浄土宗の元黒谷というのは、新黒谷といわれる京都の

春風を忘れないで欲しいと思うのは菅原道真のみでなく、現在の我々でも春風をまちこがれているものである。今回は徳本風を紹介したい。

徳本の名号石は全国に三五六基ある。しかし、これは徳本のもとに「名号石願」の申請が出されているものであるから、実際の数は四三〇位と推定される。これはその一つで、千葉県銚子市春日町にある三祖良忠上人ゆかりの浄国寺境内にたてられているものである。

徳本は宝暦年間の生れで半僧半農の修行をし、和歌山、京都、大阪、兵庫などで在地の信者に親しまれた捨世僧である。修行中の名号は江戸伝通院の請待にまでに発展した。それで文化十一（一八一四）年六月江戸にきた。それから六十一才で入寂するまでの五十年間の布教活動は、めざましいものがあつた。版刷名号を、それぞれ教化道場で称名の数により三通り（小・中・大幅）に分け配布したり、日課誓受、剃髪作法などを修している。

入府以来七回府外に出ているけれど、銚子教化は文化十三年二月に行なわれている。下小堀の浄福寺、銚子の浄国寺などが中心であつた。浄福寺には一丈にも及ぶ大名号（真筆）が現存しているし、この浄国寺のもの、利根川川口に建てられたものなどがある。川口の名号石は、二月二十九日徳本自ら開眼供養したものである。銚子

黒谷金戒光明寺との混同を避けるためであつたのだらう。

また比叡山では黒谷というのは、大黒谷という谷の大きが除かれて、黒谷というのであるとも聞いた。この寺に大黒天が安置してあることから谷の名前であるかもしれぬ。

沖は潮の激しさで今もなお海難事故がたえない。技術的に未熟な当時であれば、事故が多発したのは当然。そうしたわけでヒゲタ醤油の醸造元であつた田中玄蕃がスボンサーとなつて建てられたものである。現在は風化が激しく、徳本の名号と判定しがたいほどであるが、造立当時のそうした環境は今も変わっていない。これと同時に徳本は念仏講をこの地方につくつた、現在も勢大に続いている。本尊は徳本の画影で浄国寺を中心に修されている。老漁師が、

「早くトッコン風がきかないかのう。」

徳本が「トッコン」となつたのださうだ。銚子といえば古くから鰯である。銚子港は鰯の漁港であつた。トッコン風は、季節風の一種である。トッコンさまが吹けば鰯漁が全盛期となるのである。漁は漁師であれば生活の網であるのが当然。漁の安全と大漁が念仏講の存続となつたのであらう。そこには漁師の純粋な信仰がうかがえるし、トッコンさまが救いの主であつたときもあつたのに相異なる。

「南無阿弥陀仏徳本（花押）」けっして上手な字ではない。けれど字の上手下手は問題ではない。えてして字の上手、下手で人間が価値が定まるといふのは誤まつている。その字を書いた人間の魅力の問題とすべきではないだらうか。

（田中 祥雄）

宝物シリーズ

徳本上人御名号碑

千葉県銚子市・浄国寺蔵



「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 五月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和四十五年四月二十五日印刷
昭和四十五年五月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

法蔵館

京都下京区正面烏丸東
振替京都2743・電話371~0458

新・仙教童話全集

監修 浜田広介・中村 元
編集 花岡大学

解説付 菊判・上製本・函入・各¥700

全8巻
別巻1

予約受付中
内容見本呈

混乱の世相の中で子供を正しく育てようとする意欲的な執筆者によりインド・中国・日本の説話、伝承から取材し、保育現場や家庭の要望にこたえる心あたたまる画期的全集

特色の二三
幼児には読んで聞かせ、小学生は自分で読んで下さい。大人も読めば童心がよみがえり、それぞれの話がどんな事情で成立したか、中心的な意味、取扱い方など専門学者の解説

△内容▽
1 ジャータカ 2 仏典I 3 中国
4 日本 5 ひろすけ幼年童話集 6 逸話I 7 逸話II 8 日本名作別・年中行事既刊・発売中
(毎月一冊二冊ずつ刊行)

1 ジャータカ(弓の名人、さるのはなしなど)花岡大学著・6 逸話I(釈迦・法然・良寛など)山本和夫・久保喬他著・別巻 年中行事12ヶ月

国内・国外・旅の御相談は……

旅は楽しいプランから——目的地、コースの選定、宿舎旅券のお手配など、ごめんどうなことはなんでもお申しつけください。

パン コク シヤ
(株) 萬告社観光部

東京都品川区東五反田 2~1~3

TEL (441) 1693・7012

東京都登録邦人第61号